

骨董集

卷之四

1545  
4







古画勸進比丘尼繪解圖

柳塘館摹藏

按此画は今より約百八十年  
 前曾永中より作れる  
 後より改を白紙布を  
 したるものあり  
 七十一番職人尽みの  
 後を合せり



骨董上編下之後

あるべ

漢土は五月五日艾をちひさき虎をけくまを改めくまをあらう。それを艾虎と  
 たり。漢籍よあまうんえたり。和漢相似たるあり。

端午の頭巾袈裟小人形

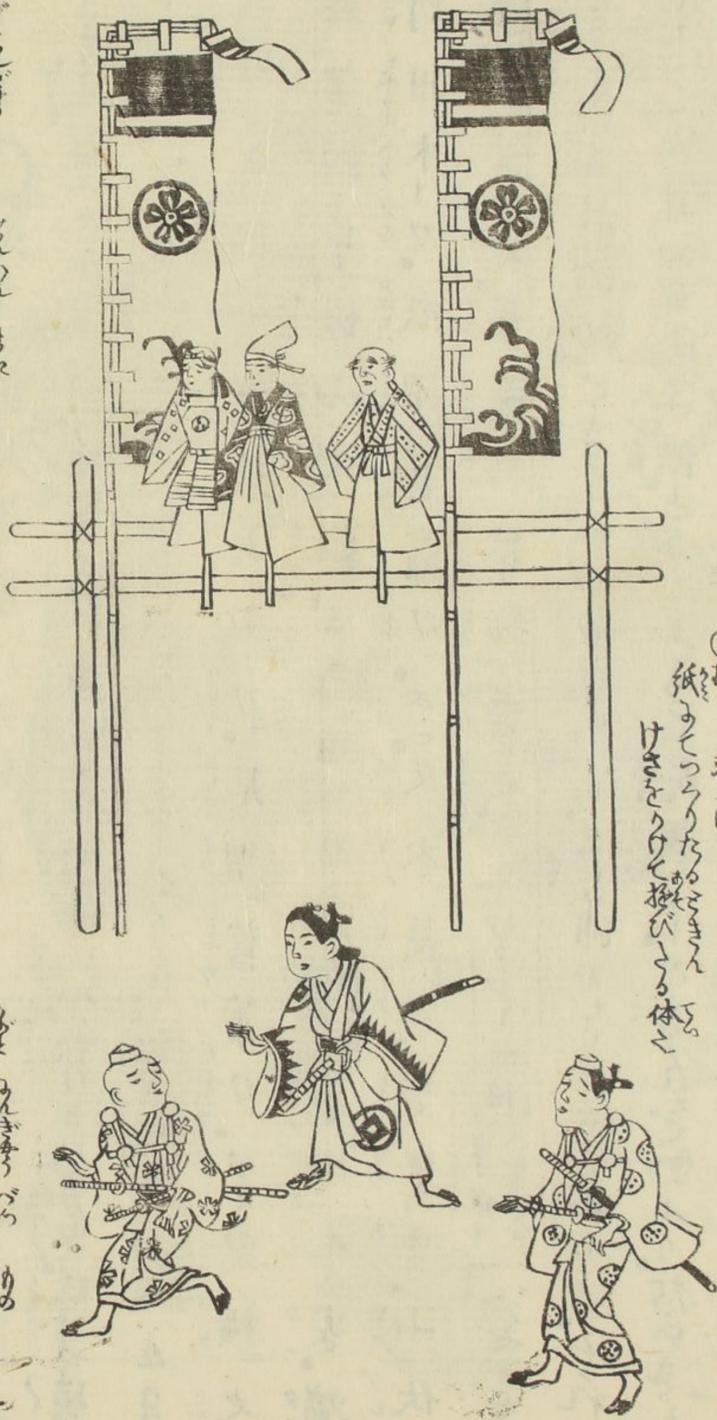
今より九百二十三年前延宝天和貞享元祿の比は五月五日男児紙を造れる  
 頭巾袈裟を着山伏の体に出きてあび奉りあり。日次紀事 延宝 五月  
 五月の條よ云「以柳木作大小刀是謂菖蒲刀男児横之  
 於腰著頭巾倣山伏躰云云」  
 貞享刻 小川人家端  
 卷之七  
 于所用木刀或謂菖蒲刀云又木長刀木甲甲山伏  
 之頭巾袈裟并藥玉等物賣之云云  
 物傳 享保十 六七十年  
 八年春  
 吹まうむの五月の初こきんごごゆけあら。菖蒲刀をうりてありく。それを  
 子供求て五月四日小子供志あうぶよて捲巻しこきんをあかりたときを  
 也。菖蒲刀をさしあらしを吹あり云云」とあり。それらをとえりすすよ。  
 きて下古画よらうあり。今いそくれ小なる奉るればあはじ。

○元禄年中の印本

大和耕作繪抄

卷二小所裁の図あり

蔵本



○むら—端手にをのついで  
紙つてつらうたのまきん  
けさそりけと扱ひるる体と

○増人形ののみ先板の巻ものついで元禄のころいまでよくのごく増と人形と人形の制の質を糸をとりて其角が五集よ一とさうごまや傘よつる小人形といひも  
後とあると時代すれバ小人形のさうるべしそのころを目的まじりていふるはちと  
とらるにぬぼる

骨董上編 下之後三

○後妻打古図考

四

古事記  
梅原  
宇波那理  
大和物語  
又樽垣  
集  
古言

うへありとい後妻をいふる古言と  
嫌 宇波奈利

和名鈔

後妻

和名宇波奈利

新撰守鏡

昔物語に室町家の比のさうりや相当打といふるはさうり  
とらんうへあり打らぬひけるさうり妻を離別して後の妻をむり入るよ  
其あつふらりて前の妻あつふき女どもをたのめ相当打を催しやぶ前小後  
の妻の方へ使ひをほりけりて某の日某の時相当打よやくべきさうりをひかり  
其日よけれバ前妻をさうりめとてあつふら女どもたのめあつふひさうのもの  
をりらて後の妻の方へゆき臺所入りて打まらる後の妻の方よもあつふ  
女をたのめかきてさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうり  
の媒妁せし者の妻と待女郎小あし女と双方の中よりあつふひまなめ  
かへらるありたがひに男をさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうり  
以上撮要



此坊も別人に知られぬ路のともへの  
あるがたどてあひ混へうへん。

【藝上の謡】「あら恨めや今打ていあさひひままだ。あら浅きや。六条の  
沖息所やどのあん房もてういあり打のあん振廻りてくる事の本き唯が不

しめしめりやいりやいりよひかとも今打ていあさひひままだ。枕よまらうらら  
【打】は文を考ふや貴き此牙も下まゆの女のこころういあり打をいあさひひままだ。枕よまらうらら  
【打】は文を考ふや貴き此牙も下まゆの女のこころういあり打をいあさひひままだ。枕よまらうらら

又鉄輪の謡「いさく令をさらんく。ありてうりあげ後妻の髪をまよ  
あらまひと打やうらの山乃夢うらつともワのさうきまよ。云云」  
【鉄輪の謡】いさく令をさらんく。ありてうりあげ後妻の髪をまよ

又三山の謡「みまび余所も移しまき花のういありとてあさひの  
たちを折持て。中畧。移しまき花のういありとてあさひの

られいあさひのういありとてあさひの  
【三山の謡】みまび余所も移しまき花のういありとてあさひの

骨董上編下之後五

崑山集 女四撰明曆二刻  
きぬの妻のういあり打り槌乃音 文三

汝金袋 明曆万治ノ比  
嫁が秋のういありうららまこれ 正定

無眉 明曆ノ比  
掃妻のういありうららまこれ 貞晨

新讀おけくハ集 万治三撰寛文七刻

前々 きまよる坂乃辻ままら袖 貞徳

林逸節用集 明應  
言辞部 嫌打 書言字考 嫺 毆

下に摸しつてせる古画をいあさひひままだ。あさひひままだ。あさひひままだ。

於國哥舞妓古図考 五

下摸しつてせる古画の原本に附たる考へむきに國女慶長年中あづは  
小下りて哥舞妓踊をり事。或古記小んえたり。當時目のまよらん  
さゆをわける後あるべし。とゆるいさもあさひひままだ。今按むらふ。

羅山先生文集 卷五 よ云「今之歌舞妓非古之歌舞妓也。若



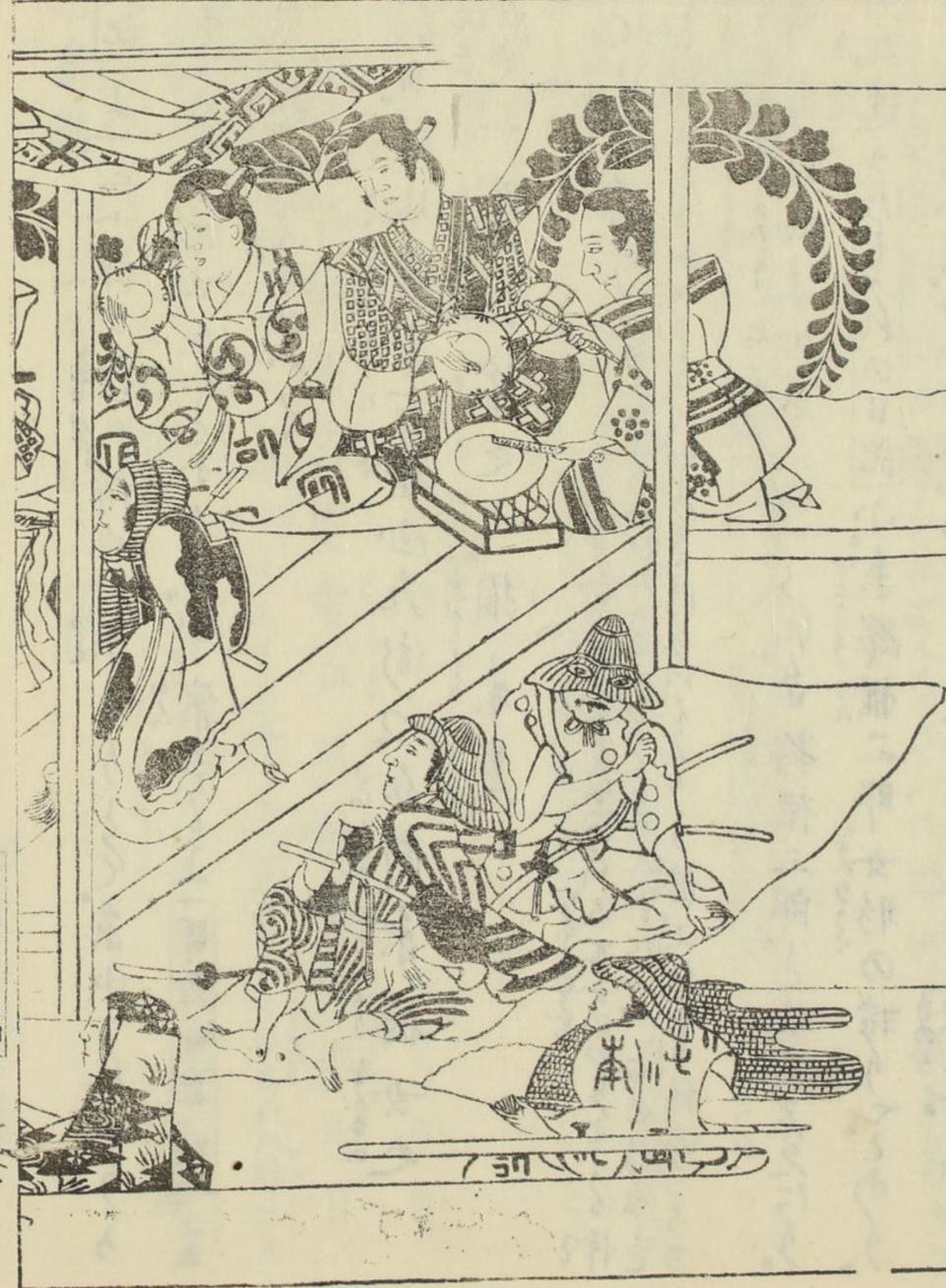






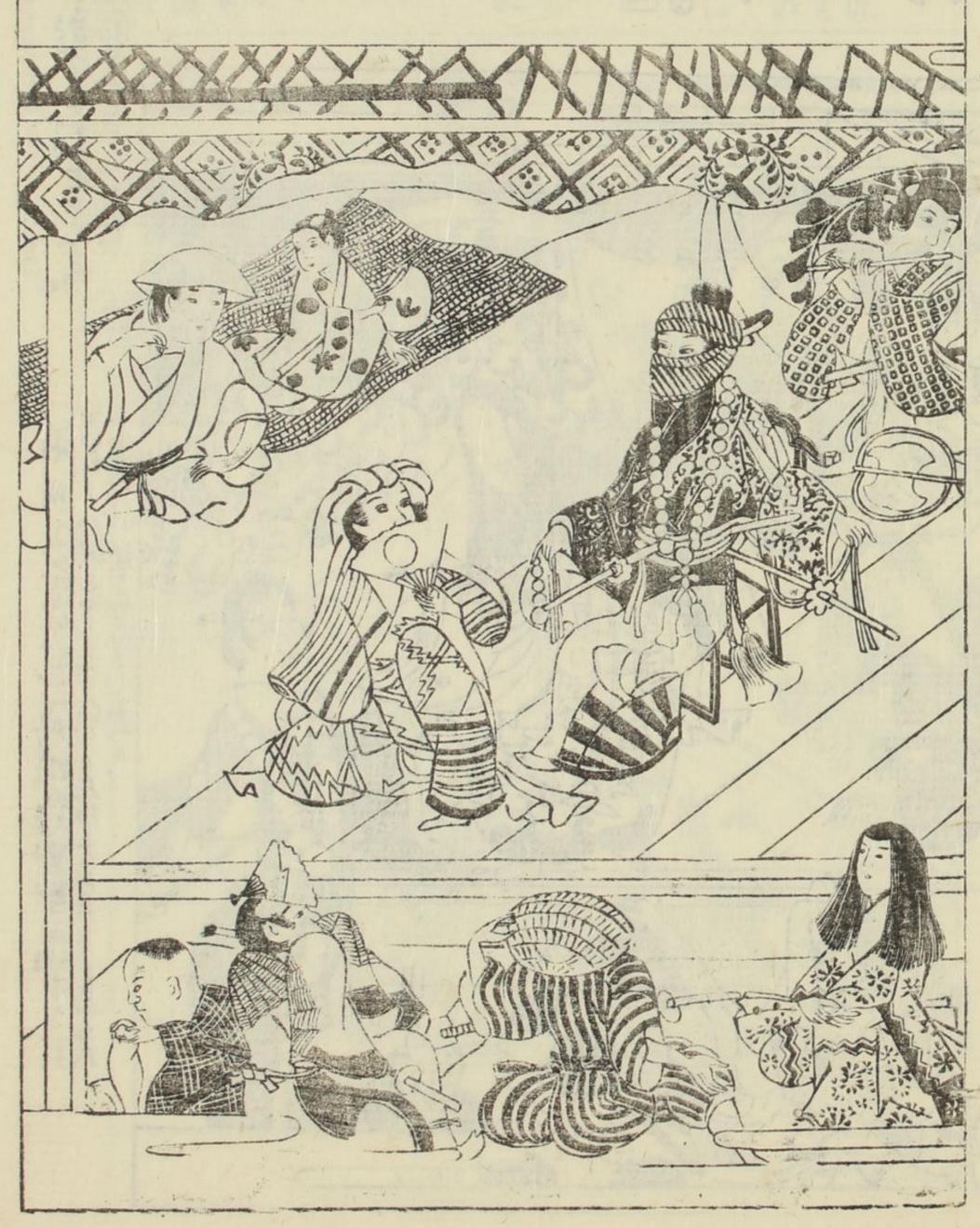
○慶長年中の繪於國哥舞妓圖  
原本梅龍園藏  
摸本著作堂藏

○此後三絃なり。  
○此後及名所記  
「その時の三味線は  
あつりき」といふも  
衆命なり。  
○このころをもちへうた  
をあげしころの「同番  
をえたる。待たせたる  
かうする伴あるべし。  
つうたんとおあがるの  
あつりき。先板の巻も  
あつりきなり。  
○椅子よ尻わけたる  
らにが男よ拾したる  
作るべし。  
○羅山先生文集 子女の  
駢服を服し 髪を  
断て男の髻とす  
刀をこころに懐きて  
おふとあるに衆命と  
又。  
○この物語よ。髪を



同書上編 下巻十

みどり切りきりきり  
よひひきききききき  
とりのりりりりりり  
りりりりりりりりりり  
○京童よ。髪を  
断て男の装束  
をしめてきききききき  
きききききききききき  
○念珠をこころに  
たたく。哥衆妓事始  
の説よあつりき。その  
紋つげたるもめぐし。  
紐糸の巻。先板の巻  
よつりき。衆命なり。  
あつりき。もあつりき  
がりなり。  
○羅山先生文集 小  
男の女服を服し  
あつりき。あつりき。女  
拾したる。こころを  
と三十郎あつりき。か  
ひもをひききききき  
あつりき。あつりき。前  
前よつりき。あつりき。



○かろ髪を倭装を著けり髪をりて  
 かにねんぶつをりての作あるべし。

○かろ髪を倭装を著けり髪をりて  
 かにねんぶつをりての作あるべし。  
 不海及名不記よ。  
 ぬり髪をようれあわの  
 ごとみのをまこひ  
 見障をよびよりひて  
 云云。とりて符合せ  
 玉佩は似るりの  
 あれどもごみのを  
 ちれよるありし  
 あるべし。足袋のむ  
 さりよりのりえ  
 板の巻よるむ。  
 さにびとる。京童  
 小早をよるむ。  
 会儀をよるむ。  
 とももよるむ。  
 ○ごよ念珠をよるむ  
 かける男ぶにがま  
 三十郎のるむ。  
 ○あのかろ髪をよるむ  
 たる符合せよるむ  
 とい園の真あり。

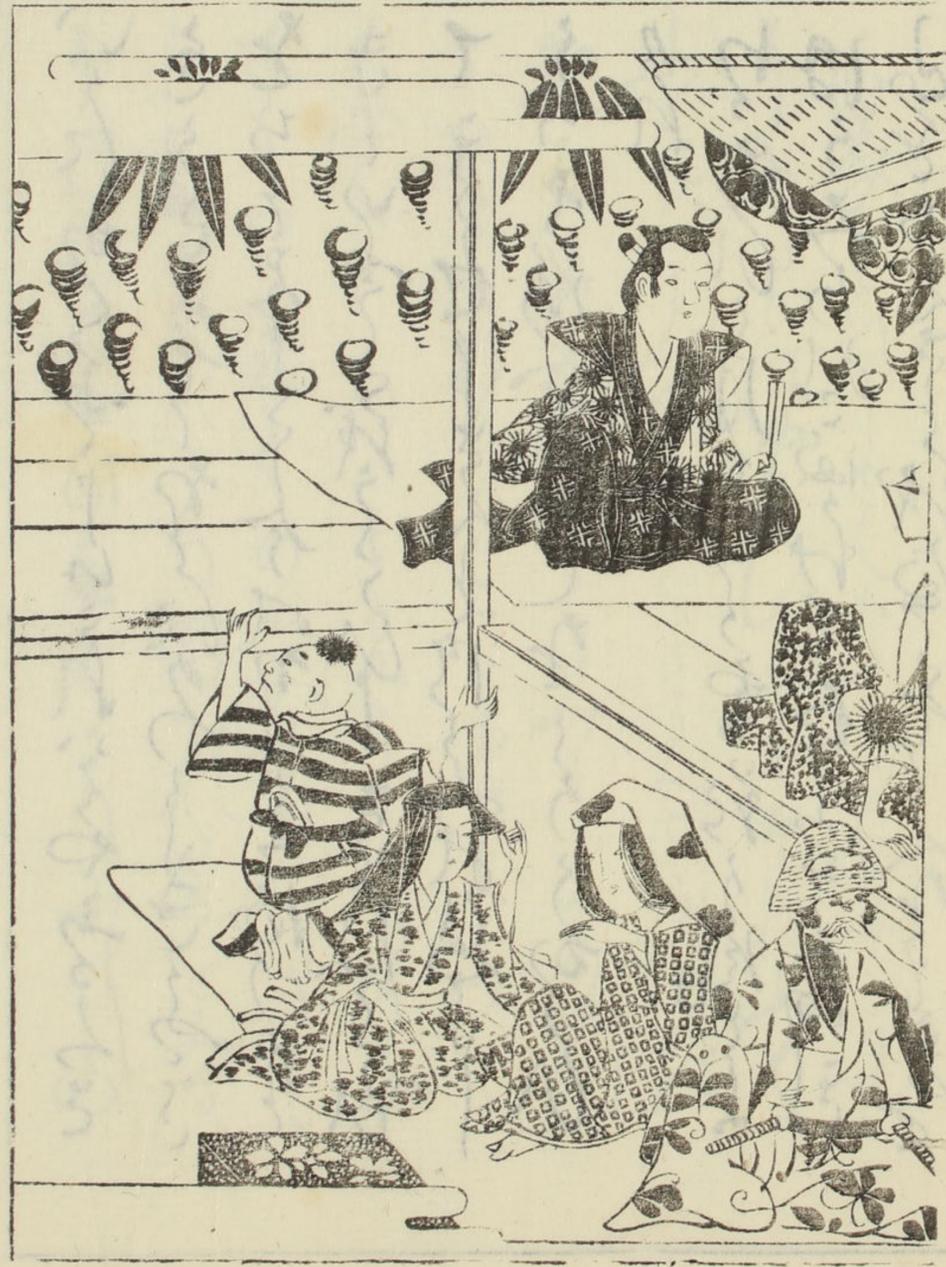


○かろ髪を倭装を著けり髪をりて  
 かにねんぶつをりての作あるべし。  
 不海及名不記よ。  
 ぬり髪をようれあわの  
 ごとみのをまこひ  
 見障をよびよりひて  
 云云。とりて符合せ  
 玉佩は似るりの  
 あれどもごみのを  
 ちれよるありし  
 あるべし。足袋のむ  
 さりよりのりえ  
 板の巻よるむ。  
 さにびとる。京童  
 小早をよるむ。  
 会儀をよるむ。  
 とももよるむ。  
 ○ごよ念珠をよるむ  
 かける男ぶにがま  
 三十郎のるむ。  
 ○あのかろ髪をよるむ  
 たる符合せよるむ  
 とい園の真あり。

かろえあるべし。

○かろ物の人男女とも  
 くにのりてのりてを  
 あつてよるむ。人目をあ  
 ぶ作べあるむ。  
 さるをよるむ。  
 びりの質直の  
 風俗をよるむ。  
 たるべし。前もよるむ  
 たりて。あつてよるむ。  
 ぬり髪をよるむ。  
 質朴あり。

○かろ髪をよるむ。  
 慶長年中より。今  
 文化十年までかろを  
 二百十餘年のしよの  
 質素の風俗目のま  
 よるむ。ごよ念珠をよ  
 せよるむ。ごよ念珠をよ  
 るむ。ごよ念珠をよ



ごよ念珠をよるむ。



一條院の  
后上東門  
院

○酸醬を吹かす事 [七]

今の世は女童のわづきを吹かすはいとふき事 [栄花物語 八]

今川花の巻寛弘五年の所は「宮」の侍は後小たけりまふ云  
たのほ乃侍年をもちむらと小をかりませどいとまうぞたけり侍  
ゆりさうにあらむと心めとがたまむさうせ侍り云云 法及志らくら

あつちづきまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ  
とあり當時わづきを吹かすはいとふき事ありければこそあつちづきまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ  
しうへい宮中せんごしとまふらうりまふられをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ  
今文化十年まどがうそ八百六年ありかゝる侍あつちづきまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ

源氏物語 世分の巻まぐらうのまをいづるあつちづきまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ  
らうりて 髪のかくれるひゆくうらうらうち不也とありまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ  
榮花物語のまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ

枕ノ草紙 異本小「たけきまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ」  
あり後づきまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ  
ありまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ

ありまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ  
ありまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ

本草綱目

卷十 酸漿の條下 主治云「食之除熱 治黃病」  
益心兒 附方云「酸漿實丸 治婦人胎熱難産」

益心兒

附方云「酸漿實丸 治婦人胎熱難産」

ありまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ

○小兒をあやひよバアといふこと [八]

古今著聞集

卷十 怪異部 ちげ物 又鬼をさうれたるをいふ條に

ありまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ  
ありまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ  
ありまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ

○比比丘女 [九]

今童むびよ子とらうくといふ事をせめりこれいと古に事と古に比比丘女と  
ありまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ  
ありまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ  
ありまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ



○比比丘女圖

られ今のつよよもてほをくらふ子と  
 とりかららねばびの原あり比丘比丘尼と  
 りのそ音ほよてひふくめとらり前も  
 いもらとく惠心院の傍都よりとまれり  
 るれバりしとくうられりて

日本法華驗記 下の巻よ云

僧都迨春秋七十六

以寛仁元年六月十日

寅時刻永遷化矣

とありは昏の傍都の

滅後りつらに二十

五六年をまき

長久中よ

撰る物あれば

傳とさるにたれり

續本朝往生傳 十一

元亨釈教 卷四 下丁

みも僧都の傳を載く入滅の年月日ありひよ享年られにあらざり



冊黄上編 下之段十

寛仁元年より  
 今文化十年まで  
 八百七十九十七年と

○又鬼ワ〜とて、見を

〜らるるまねびとる



○これ古画よめらるる  
 三国傳記の文の  
 ありきをもちとるん  
 とて今あらた  
 ぼくまいたる圖あり

一新青筆





治承四年  
ヨリ今文  
化十年  
マデ凡  
六百二十  
四年七

長門本平家物語 卷九 治承四年。清盛入道福原よ在て夢よされぬと。

あらぬのれりる事をいふ所よ入るもまけどられらるるをいふは

人の目くらむをする事よなごひよまごまごせむとあらまて

日蓮御書録内 報恩抄の上よ云 慈覚知證と日蓮とが傳教大師の清奉

よ不審申ハ親よ値ての年あつそひ天よ値奉ての目くらむよつて

いとも云 建治二年七月 太平記 卷十 建武二年十二月十一日箱根竹下合戦

の條よ云 加様よ目くらむして録倉よ集り居る叶まじ云

異制度訓往來 正月七日の消息の中に遊戯の名目をあつて目比頭引

膝扱云 といふ此言ハ貞和二年の作あらんと されらるる事よつて

いふ事よのめらるる事よあつて此事ハ先板の巻よいれど

うごれぬあつてびりよ

○宿世焼 十四

異制度訓往來

異制度訓 遊戯の名目をあつていふ事よ宿世結宿世焼といふ名

目あり宿世結ハ先板の巻よいふ事よ今このせの縁結とて宿世

焼の事を考ふるよ増補越後名寄 著作 卷三十二よ云 正月十五日左義

長の燃残りの本を宅の炉中よ焼其火よ縁結の齋焼と云奉と童

部共よと姿の脹とすん品形を稱して具ど云といふこれ宿世焼の遺

意よあらざる縁結のりら焼と稱する事よつていふことおがゆ

異制度訓を貞和二年の撰と決むるといふ今文化十年まてあつて四百六十八年をへる

○見世棚 十五

今のせよ商人の物賣所をだるも見世といふ家の端よ棚閣

をまうけ其上よ万の賣物をあまのて賣するもさよなるといふ名も

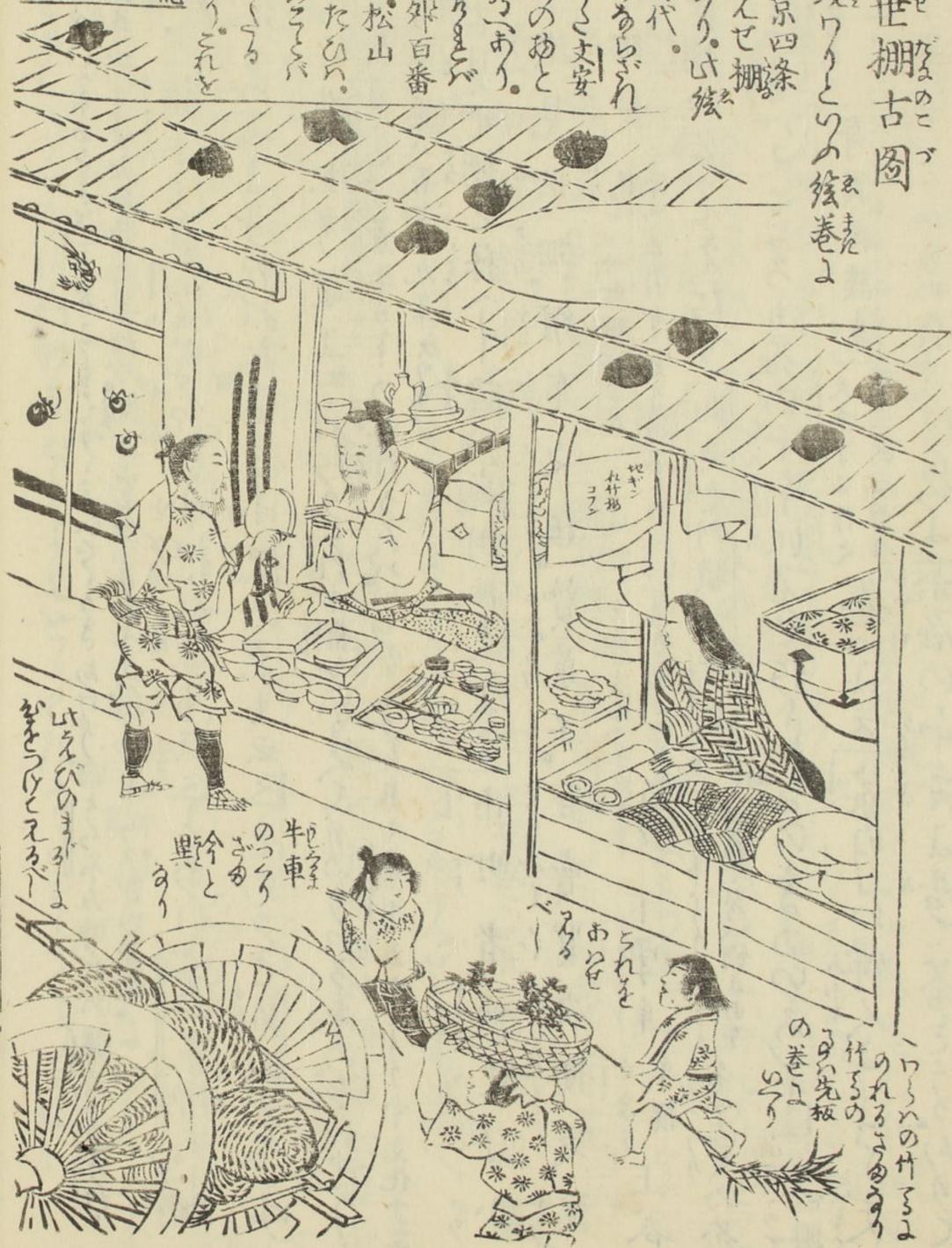
まうその棚いり物をさあき往來の人よんせして賣らんため

物あらば中古ハ見世棚といふ後よいそれを下畧して見世



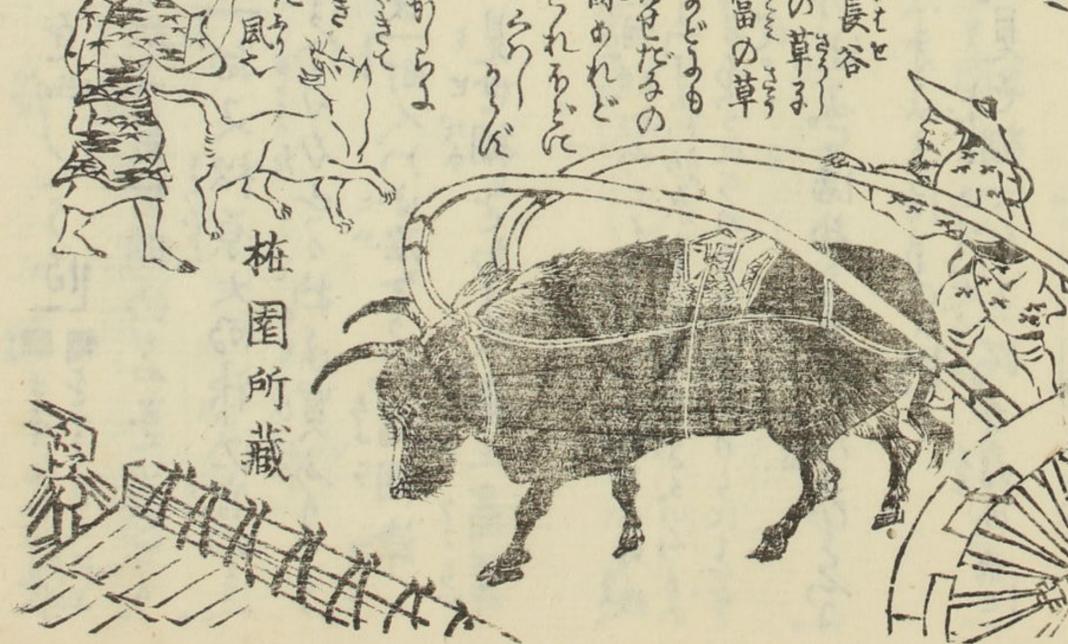
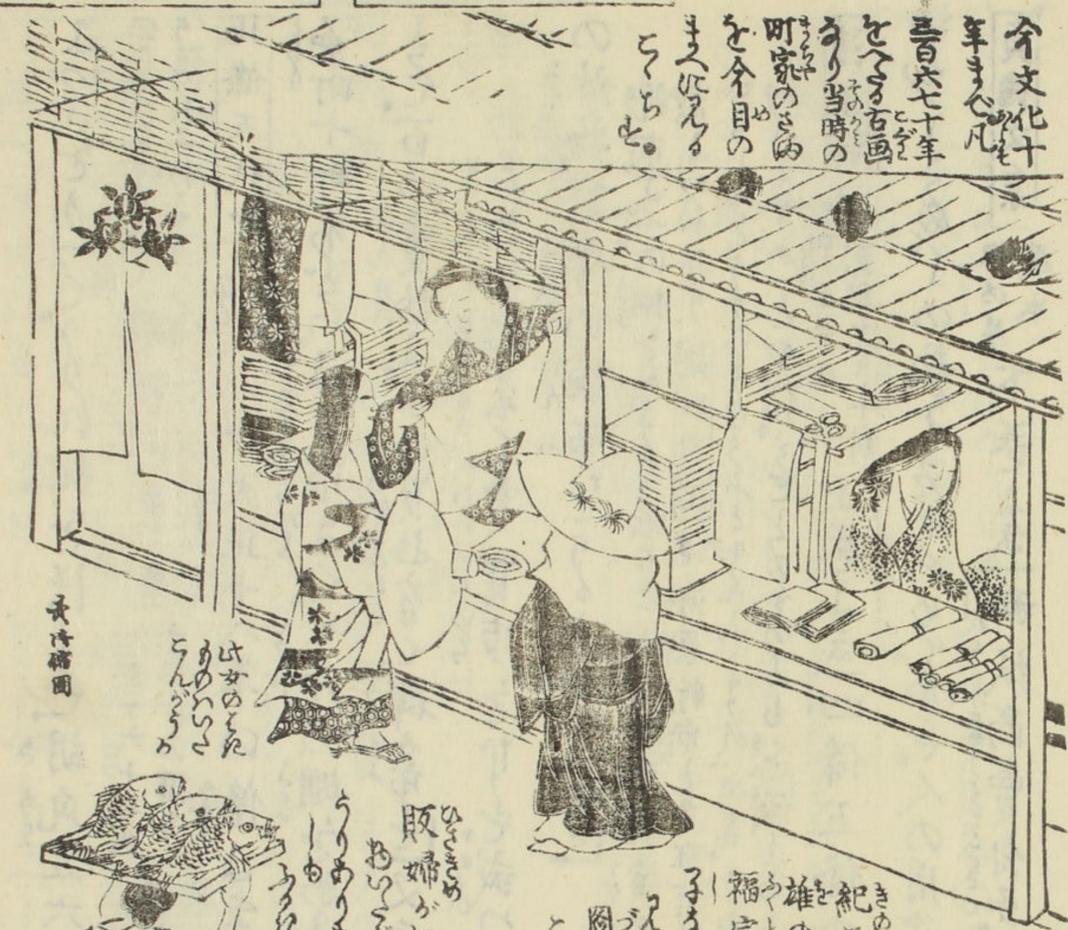
○見世棚古図

これの鏡ワリとりの後巻よ  
 戒る不京四條  
 の所のえせ棚  
 のさゆさゆり。は後  
 またの時代。  
 つまびらちあらがれ  
 どもあやうく支安  
 宝徳のころのおと  
 ありの考ありあり。  
 ころるふりま  
 りらう。外百番  
 のうらの松山  
 此後巻のころは  
 がまに似  
 ところあり。これを  
 支安宝徳  
 のおと  
 といひ。



いへびのまが  
 をさつひとえら  
 牛車  
 のつら  
 さふ  
 興冷と  
 む  
 これを  
 あら  
 べる  
 けい  
 の巻よ  
 の先板  
 の巻よ

笠おる  
 女のた  
 りのた  
 かん職  
 人足よ  
 板金剛  
 福富の  
 草子の  
 の園も  
 のれんよ  
 三つた  
 心を  
 けり



今文化十  
 年ま心凡  
 昔六十年  
 をる百画  
 のの当の  
 町家のとめ  
 を今日  
 ま入にえ  
 くらと  
 紀長谷  
 雄の草子  
 福富の草  
 子あまの  
 づきだの  
 園めれ  
 くれあ  
 らう  
 敗婦  
 うめ  
 うめ  
 うめ  
 風  
 植園所藏

七卷の  
辭庭  
訓  
古抄  
つらら

よつとをりつららに棚をほりて。胡氏五六をゆつとうか醒云今も八百の棚をまうけ氏茄子

のたぐひをささぎて天正十六十七の運歩色葉集のいひの撰 卷四よ見世棚の名をいひたり

北條五代記ひらうご 天正十八年の條よ云「拙又松原大の神の宮のま

ま町十町あらは毎日市をて七卷の棚をあらへとふりたる也。買ありうり

として。百の賣物よ子の買物有て。群集也」又云「町人の小をくり。諸國津こ

浦この名おをたふて。賣買市をたりと或い見世棚をあらへ唐土高藤

の跡物京塚の縮布をうるもあり云云新市一の棚をあらへと云云

狂言記 四卷 棚賣の詞 五卷 ありとさうろくの詞 どの外

新市一の棚をあらへと云云狂言記 卷河原新市と云狂言けいの河原のまらん市をさうろくの

詞よあらうり続狂言記 卷河原新市と云狂言けいの河原のまらん市をさうろくの

詞よあらうり続狂言記 卷河原新市と云狂言けいの河原のまらん市をさうろくの

詞よあらうり続狂言記 卷河原新市と云狂言けいの河原のまらん市をさうろくの

詞よあらうり続狂言記 卷河原新市と云狂言けいの河原のまらん市をさうろくの

詞よあらうり続狂言記 卷河原新市と云狂言けいの河原のまらん市をさうろくの

文集の實録のそめ作れり。昏中よ考ふるあり 三年午卯せり。 さららと上の古圖よ合せえていふ「見世棚のさほご考へありべ」

○商賣往來よも見世棚の名ええされば世までもさうろくの詞ありん。今もあらう

とさうろくの地の中もあらう。右の往來の元禄以後の物考證別あり

○上の古圖を考ふるよ。當時の看板水張のれんらあらう。老のれんのそめありんべ

長のれんよ。三つたららる。おみりららる。おきのれんわけららる。おきのれんわけららる

今の目ざららる。今うたららる。今うたららる。今うたららる。今うたららる。今うたららる

○虫のたれ絹十六

夫木抄九の卷 夏部三 正三位李能卿 夏草の哥小

「草あつとむひのたれさぬ結びあびてとらりつづらふ夏の娘人

此哥のひのたれさぬぬい。ま木抄のうられ難義の一つあり。詩林拾葉

卷三よ右の哥を注して云「蛇のきぬききたるを虫の垂絹と云也。夏中

行猿人草中れ及をいふせり。ありん。とららひがさあり。

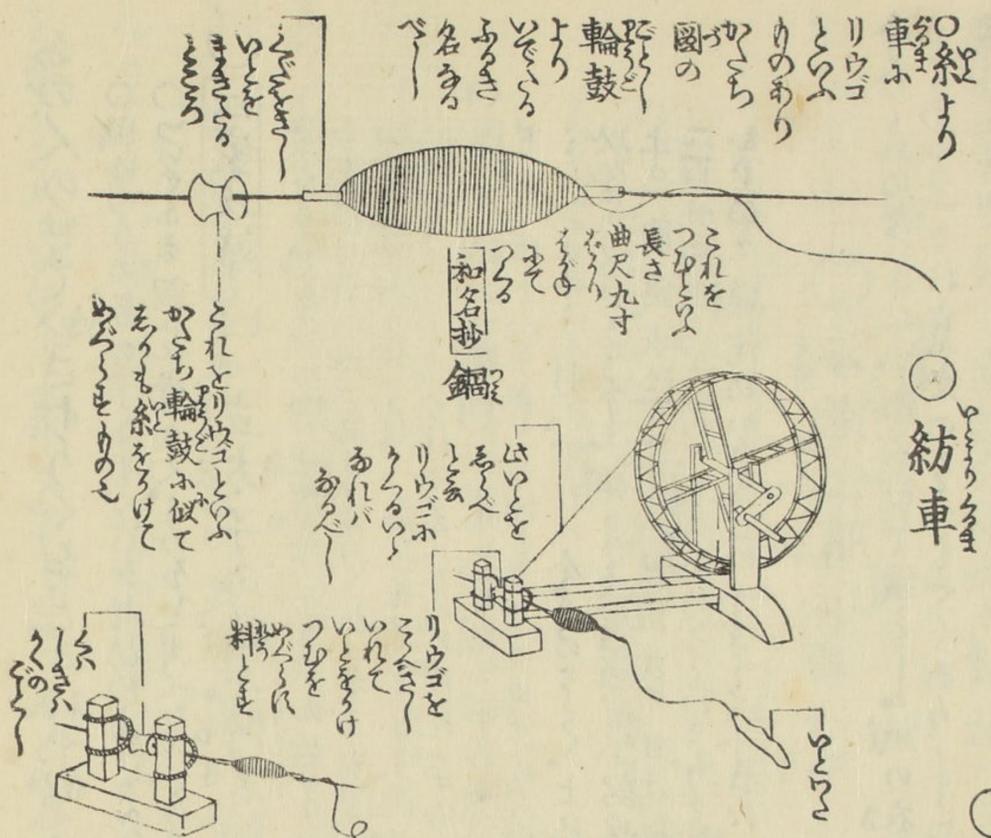
骨董上編 下之後三





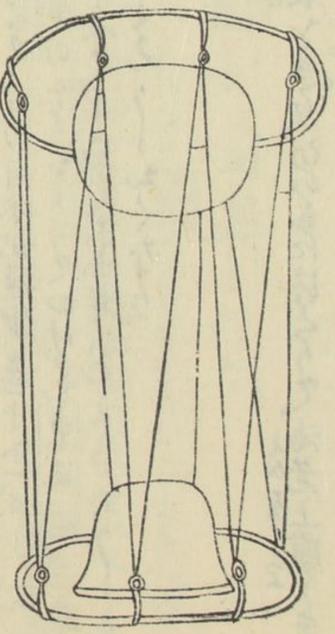


○ 紡車



○ 腰鼓圖

暇の王所々三才園會  
卷三器用三ふ載り



和名抄 小... 其形細腰鼓の...  
似たりといふこと。

東海道名所記卷四... 座...  
この宿の名物たり... 座...  
備わてある... 倫...  
みてつく... 万治の...  
當時...

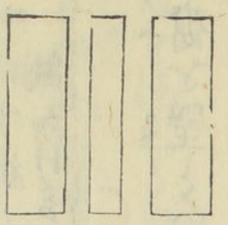
骨董上編下之後廿五

○ 刀の柄一種の...  
あつた... リウゴ柄

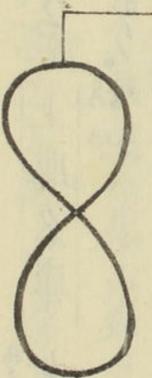


端午の菖蒲が...  
は柄あり

室町家の... 見聞諸家紋...  
の... 紋を載て



号輪鼓... 大平記の...  
軒子... 左右...  
中... 参考...  
引... 作三...  
... 中...  
... 三...

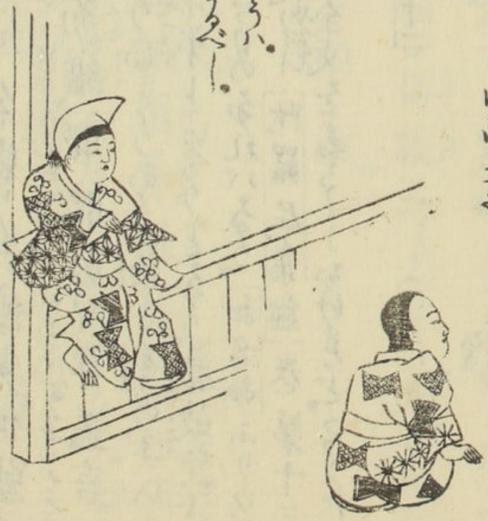


馬をかくの...  
リウゴを... 中...  
リウゴの...  
似...

○ 寛永の... 画...  
は... 文様...  
リウゴ

○ かく...  
リウゴ... 別...  
機... 考へ別...  
中編...

○ かく...  
の物...  
の...  
あ...



○腰鼓兄弟 二十

世説補 卷十九 注小 南史曰沈懷之三子淡深冲名譽有優劣世號為腰鼓兄弟 抄撮 卷四小 唐禮樂志腰鼓廣頭而纖腰腰鼓兄弟蓋言伯季優仲劣也

細腰鼓のこまの圖のごとく 兩頭ハひろく腰ハ細きをのめればなり 和名抄ハリウゴハ四十紙右に 乾闥婆の細腰鼓あり 草稿ハ全文をまろし わけごとく 餘紙あり

○おわぐ豆腐田樂豆腐上物 二十一

豆腐と壁とのこまのふるまひハ先板の巻小のれど さら引のせまを 舉七十一番職人哥合 豆腐賣の月廿哥小ハふるまひのたなをふ

上臈名事 女房こまのふるまひ 女房こまのふるまひ 女房こまのふるまひ 女房こまのふるまひ

○宗長手記 卷下 大永六年十二月の條小云 女房こまのふるまひ

骨董上編 下之後廿六

田樂多うふの盃なひうさありて 上巻中も 炉邊六七人ありて 田樂の盃

俗説ハ豆腐皮とわだのふハ訛言あり 本名ハ うば之 其いろ黄めて 皺あるが 姥の面皮ハ似し 女房の名あり 女のふるまひ

○異制度訓往來

小豆腐上物とあるこそ本名あるとされ 豆腐をほくた ふうのむし皮あまをさるひん 畧てふるまひのふるまひ 音便ハはのりと濁して うばのふるまひのふるまひ 俗説あると 〇バとらふ もろとゆと横小のふるまひ 訛めもあはれ

○菖蒲曹再考 二十二

延喜式 卷四 十一 彈正式云 凡金銀薄泥不得為服用并雜器飾 但五月五日諸衛府甲曹之飾不在制限

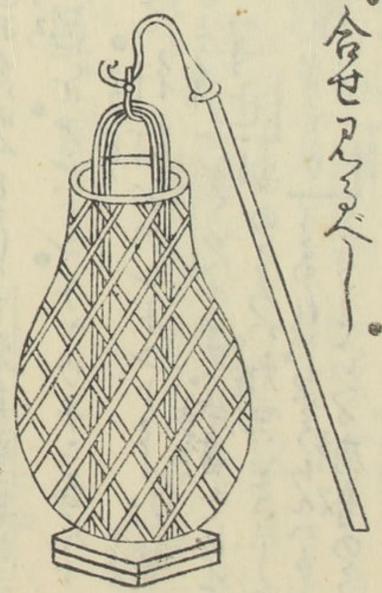
辨内侍日記 卷下 建長四年五月五日の條小云 女房こまのふるまひ 女房こまのふるまひ 女房こまのふるまひ



先板の巻小唐土の  
たむちちやうらん  
ありとよれどなぞ  
ふたむちやうらん  
あり俚紙  
縮をこぼる

とらるる所ふ「あらるる」などいれどもちやうらん鞠の勢ある火けりるびら  
のまて外いそそび唯くまき也とありこれハ籠ちやうらんハありて丸形乃  
たむちやうらんハまきも天文の比たむちやう  
らんもあり  
先板の巻の提灯の條よ合せんべい

暇の玉圻三才圖會器用  
十二の巻小所載提灯あり  
先板の巻小いそそる籠ちやう  
らん、此唐制のこころなり  
とらるるあそあそんべい



○行燈再考 二十五

行燈ハ提ありく為小制れる物也。家内ふさむあつ後の事と  
證を又アソいそそる山伏道葬送行列次第杏花園 蔵本といふ古き書小上次  
導師先達持檜次馬次捧物次左右行燈次棺云々無縁雙紙卷四尊  
宿茶毘之次第といふ條小一番幡四流左僧持二番行燈四箇右行

骨董上編 下之後廿八

群持云々

群持云々 行燈ハ提ありきり  
のこころ提ありきり  
累解脱物語 卷下 川のむらり集りけんてんふ

行燈ハ提ありきり 村中ハ者も 稲麻竹葺と並居る云々

元禄三年の御本也。そのころまでも田舎ハ行燈とさけありきり。先板の巻小引る。嵐雪がそめりく町の發句と同時ニ合せ考へべい。

○まきよなるのちやうらん乃再考 三十六

先板の巻小秋の夜長物語を引てまきよなるのちやうらんといふ魚鱗乃  
誤めて綾とそりける挑灯あんといひハあてれひぐとそりまき古印  
本ハまきよなるのちやうらんと假名おわけと後小古写本とそればハ魚鱗の  
燈炉とあり。これたしある證あり。燈炉とありてハ挑灯の證ハあつて  
とのまきよと上ふりてとてと挑灯と燈炉ハひと物なれば古印  
本ふちやうらんといふも。後のさうらふあつてハ○さて魚鱗の挑  
燈といふハ唐国の魚鮎燈の事ニ明の田汝成西湖志餘 卷下 燈市

○古画行灯挑灯

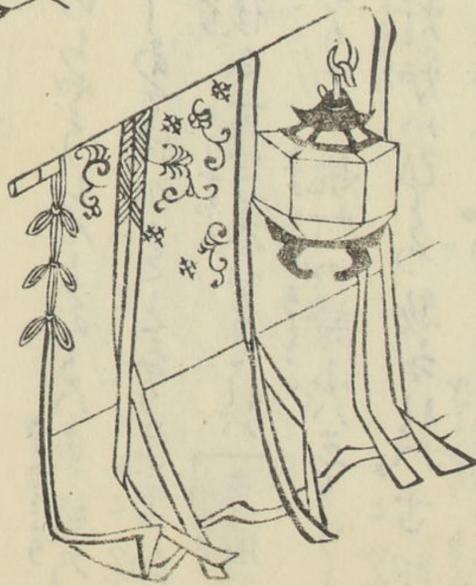
○これりあし行灯とまげあつまる  
たつまる證今茶人のゆりあつ  
露地あんどんとゆりのた古制の  
のこれりあしこれゆりあつ

三十七

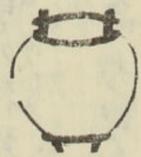
○りあし挑灯とこまげあつ  
はたふひのゆりあつ



燐洞



○は二  
あんどん  
らつ



骨董上編 下之後九

出各各色華燈中豪家富室則有料絲魚鮓云々

ハ豪富のあつたれば得たきやこれ高價のあつたべ

ノ中ニ魚鮓を載て價低きものハ成器難得とあつてもおひやべ

爾雅釋魚の條下魚鮓の事詳之本草綱目卷四魚鮓の條下諸魚

の腦骨を鮓といふとあれ古へ此不渡り

炉とも挑灯ともいふべし

色正青云々枕如琥珀可以籠燈

形似鯉而背青色又頭中骨煮拍之可以製器

打ひらいて灯のおもひはこれるものなり琥珀のこころを煮てやうけ

ゆつゆつとこころのこころをあつた秋のまもるはこれるものなり

林逸節用器財門魚腦瑤之桂川地藏記弘治二上卷外魚腦

檀梳象牙引壺頗黎卮瑠璃壺云々





これハ龍のうしろ  
 あまのついでに  
 たまのついでに  
 屏風の繪  
 寛永正保の  
 の



京山人石樹摹  
 百樹

東鑑のこころを注せらるのふ手鞠と手毬小作と手毬會ハ打毬の事なり  
 といふも一異制度訓ふふ手鞠打とありて二種のゆとせりやふ手毬會ハ  
 打毬ふりやふりといふらふ

骨董上編 下之後世二

此古画をいふ手鞠と  
 はくつと蹴鞠より  
 うつれりといふこと  
 考へおのり  
 東鑑小手鞠會と  
 あまのついでに  
 今も田舎  
 ありて五人  
 十人會と  
 てありと  
 はくつと

ちやせん髪  
 うん少別ふり  
 中編ふり

江山堂所藏

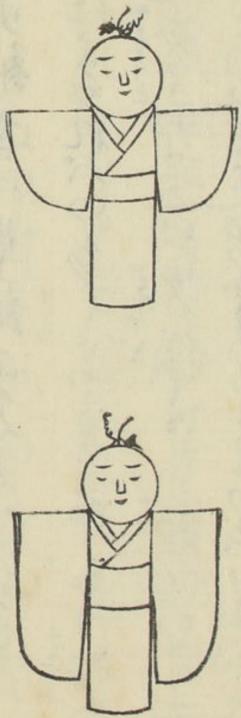






たろあのからなまきと。つみしんの質素のあざうり紙をまきりのあねばいしんり考とくろで  
あまのせり。龍の條は合せるるべし。

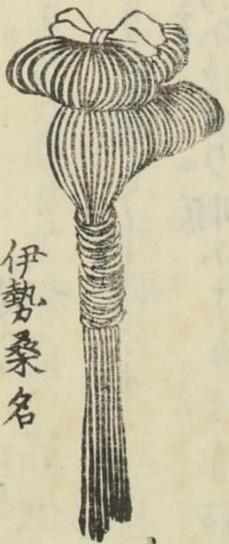
○八月朔日 姫氏雛圖



○九月九日 髪葛子圖



桑名こころあてハ  
ひのお草を  
かづら草と  
りやとぞ



伊勢桑名  
公羽麻呂寫真  
骨董上編 下之後卅五

攝陽部談 卷十六ゆゑ「姫氏」  
住吉郡 遠里小野の田圃の作り  
所は市店小出を多ハ堺道よ  
あり大さ鷲の卵のごとく。色  
きりあて白くゆとりて人の面を  
画かきそ 幼童の顔と久あひだ  
黄色あまもあり。黄く白くもふ  
美麗。とくれて艶き形と  
以て号しとつり。此書ハ  
元禄十四年印行せり。  
これらもそのころあやうく  
ひめらのひのまをのてあまひ  
る流之龍のひあうるのくろふ  
引のせれば。筆のほのぞに  
こふ筆。

○花びとの考 ○唐土の鞆子ハ此の羽子れ子ふ似たる事 ○魚とくるとの再考  
○きりと灯籠の考 ○獨樂の考同古圖くまぐ ○梓現寄絃口寄の考同  
古圖 ○編笠の考古圖くまぐ ○端午れなごり花五月まのこの考同古圖  
○宗任が梅花の哥の考 ○朝夷名が鶴の紋の考 ○鱗の考 ○編木摺門説  
經の考同古圖 ○放下僧くまぐりこあやあごあや竹の考同古圖 ○千駄櫃  
の商人の古圖 ○せんと物賣の考同古圖 ○茶笥髪三里紙の考 ○女の髪  
の風古圖くまぐ ○そんと物并ふ文字入の文様の考古圖くまぐ ○目黒の  
ゆら花の再考 ○いゝをりくまぐ ○棚機の牛馬 ○尻おひ比丘尼 ○踊  
の古圖くまぐ ○蠟燭 ○若衆哥舞妓れ古圖 ○四屋敷の考 ○手管  
いゝ詞のりこ ○枕久塚の考 同清水録の圖 ○祇園梶女の肖像 ○友禪漆の  
考 此外あまこあれどもくまぐ

追加 望一千句辨法 辨法のひりやぬりぬけおろしとての前句は 望は五尼のしとての徳妻とては  
 なり。これれももういなり打の二律とてとて。 誹諧家譜とてとてふ杉田分当望一八寛永七年六月二  
 没せり。行年八十三なり。きこぬふまふて六天文十九年の生れに。いま。ういなり打のたを。時多る。此  
 ういなり打の 怨妻のこことたせり。うい。きこぬふまふて六。あげてか。又寛永十八年。帆  
 徳元が著せり。誹諧初学抄 巻の初ふりなり。打とて。誹諧家譜 在哥坐 仙臺比五尼 坂のふれり  
 ひくに坂後ともわけり。時鳥 松山 致世とあり。これびくの後とて。いなり打のたを。寛文五年の撰  
 Omitaと龍のそれくの条ふ合せん。

江戸 醒齋老人著 京傳

備書 島岡長盈

同 凡例目六下之巻末自 藍庭林信

刷人 廿四紙至卅六紙 名古屋治平 朝倉吉次郎

加減朱子讀書丸

一包 氣とんとはよくおわがえとよく心腎のきとんを  
 一五五分 生れつきとて多病の人用て。老若男女ふまふて。いなり打のたを  
 ほいどわつて心をつふ人いなり打のたを。天壽をととて。いなり打のたを。いなり打のたを  
 強ひふたより益多し。つと。いなり打のたを。いなり打のたを。いなり打のたを。いなり打のたを  
 印章篆刻 玉石銅印古体近作ゆふふ應を。らふ石上刻一字  
 一秋次刻一字朱文七白文五分大印八此限よめ

京山人百樹 骨董上編 下之後世六

和漢圖書出版發行所

發行兼 印刷者 東京市京橋區南傳馬町二丁目 藤井利八  
 發行所 東京市京橋區南傳馬町二丁目 松山堂書店

